

ます。

このチェチェン戦争問題に私は10年近く関わってきました。この問題と私の出会いについて少し触れたいと思います。1991年の湾岸戦争での反戦運動、そして翌年のPKO法案をめぐる自衛隊の海外派兵反対運動に積極的に関わってきた私は、その後平和を創り出す運動の必要性を痛感していました。そういう中で1994年12月にチェチェンの独立を阻止するためにロシア軍が戦車部隊を中心に侵攻を始めましたが、国境線上ではそれをチェチェンの女性たちが人間の鎖で食い止めようとしていました。そしてそれはあっさりと突破され戦争が始まりました。そのことが日本でも本当に小さい記事でしたが報道され、それを私は読みながらも何もできない自分にいらだっていました。

その翌年の3月にチェチェンのサマシキ村でロシア軍の特殊部隊による住民虐殺事件が起きました。当時ロシアで反戦行動を行っていた日本山妙法寺の寺沢潤世さんがその現場を訪れ、そして日本に4月に戻った際にその痛ましい事件を報告されました。それを聞いて私は、自分が結果的に無視してしまったチェチェン戦争の始まりがこのような事態を招いたことを後悔し、この事件をきっかけに戦争の根本的な解決を探り、平和を創り出すために新たなNGOとして「市民平和基金」を立ち上げ、それ以来チェチェンに関わるようになりました。

これまで難民への支援やロシア・チェチェンのNGO代表を招いての平和キャンペー

ン、チェチェンの大統領選挙での選挙監視へのボランティア派遣などを行ってきました。なかなか報道はされないチェチェン戦争ですが、それでも去年はチェチェン戦争に関連する書籍が日本でも5冊続けて出版されるなど、少しずつ関心が高まりつつあります。そうした流れを受けて、今年からチェチェン問題に関わる個人や団体が集まり「チェチェン連絡会議」というネットワークを作り、チェチェンの平和を訴える活動を行っています。10月末にはロシア人のジャーナリストで数少ないチェチェン戦争の真実を報道し続けてきたアンドレイ・バビーツキさんを日本に招き、チェチェンで何が起きているのか、そして戦争の影でロシア社会がどう変わってきたのかを報告してもらいました。

この間のチェチェン戦争を口実として、ロシアではプーチン大統領の強権的な政治が続きました。テレビメディアを中心とした言論への統制が進み、また野党勢力を支えてきた新興財閥の解体などを通して実質的に議会を支配する中で、地方の首長の大統領による任命制やかつてのKGBを超えるといわれる情報機関FSBの権限肥大化が進み、ソ連時代を思わせる独裁的な強権政治が復活しました。むしろそのためにチェチェン戦争が必要であったと言えるかもしれません。実は相次ぐ「テロ」事件も中にはロシアの情報機関の関与が疑われるものもあります。

今世界各国で「反テロ」を掛け声として、基本的人権や思想表現の自由を否定しかねない動きが広まっています。この日本も例外ではありません。有事法制が整備され、自衛

隊の海外派兵も恒常化しようとしています。そして9月の総選挙ではロシア並みの巨大与党が出現しました。そういう中でチェチェン戦争という極めてマイナーで遠い地域で起こっている問題を通して、私たちは今の世界が直面している問題を見ることができません。そしてだからこそチェチェンの人々が願う平和への思いと、ロシアの人々、そして日本の市民を含む世界の人々が求める平和と民主主義の実現への思いがつながりあうものがあるように思います。

今チェチェンの人々は残念ながら自らの力だけでは到底平和を実現しえない困難な状況に置かれています。それだけにチェチェン戦争の平和解決を求める国際的な世論が必要です。私たちの無関心が戦争を長引かせ、そして悲惨な「テロ」を生み出している現実があります。チェチェンに平和を！の声をぜひ世界に広げましょう。そこにこそ私たちの未来も共にあるのだと確信しながら。

◎◎◎ すりらんか通信 ◎◎◎

NPドイツ・スピーキング・ツアー

2005.11.22

元フィールド・チーム・メンバー 大島みどり



2年間の非暴力平和隊（NP）スリランカ・プロジェクトの任期を10月に終えたわたしは、日本に1週間弱ほど帰国・滞在した後、10月31日ドイツのNPメンバー団体が組織したNP広報キャンペーンの一環であるスピーキング・ツアーに向かいました。今回のスピーキング・ツアーは、ドイツのNPメンバー団体が中心となって企画・運営したドイツNP広報キャンペーン主要イベントのひとつで、ドイツ人以外のフィールド・チーム・メンバー（FTM）を呼び、ドイツの数箇所（都市）でNPスリランカ・プロジェクト（SL）の主にフィールド活動についての講演会を行うというものです。

わたしは10月31日から11月13日までの滞在中、5箇所（都市）での講演をさせていただきました。キャンペーン活動のオフィスのある、ゲーティンゲン（Göttingen）というドイツ中北西部、フランクフルトから列車で2時間弱北にある学園都市（人口10万強）を中心に、そこから列車で2-3時間あまり東西南北に向かう4市は、訪れた順に、ビーレフェルト（Bielefeld）、シーゲン（Siegen）、ブラウンシュウィッグ（Braunschweig）、ミュンスター（Münster）です。ビーレフェルト、シーゲン、ミュンスターで講演した際は、その地で会を主催して下さった方々の家に、ベースとなったゲーティンゲンでは、町の郊外にある、キャンペーンとツアーをコーディネートしてく

ださった方の家に数日泊めていただき、ドイツ家庭の生活を楽しむとともに、また昔（1100年ころの建設）の砦を訪問したり、町を案内してもらうなど、講演以外の時間も満喫することができました。

各講演はほぼ2時間を予定していたため、最初の1時間強を、スライド・ショーを交えたわたしの話しに、そして後半1時間弱を、質疑応答とディスカッションにあてることにしました。ドイツ語を話さないわたしのために通訳（英語・ドイツ語）を各回準備していたのですが、話しの部分では、一度の会を除き、通訳を介す必要はありませんでした。通訳が必要な場合、わたしの話せる時間は1時間の半分、つまり30分になってしまい、いくら人前での話を極力避けたいわたしでさえ、30分でNPとスリランカ、そしてわたしの2年間の体験を話すには、かなり無理があると思っていたので、通訳不要という事態にはかなり助かりました。たいていの会では、まず始めに、一緒にツアーを回ってくれたコーディネーターか、あるいはその土地土地で会を主催してくれたグループの代表の方が、会の趣旨とNPについて簡単に説明をしてから、わたしの講演に入りました。参加者人数は、最初の2回が20人程度ずつ、3回目が4人、4回目10人程度、5回目5人というような小規模なもので、キャンペーンのためにも、またせっかくドイツまで来たわたしのためにも、もう少し大勢集

ることを期待していたコーディネーターは、かなり肩を落としていましたが、少人数の集りはそれはそれで、詳細にわたる質問や意見交換もできるので、わたしはあまり気にしませんでした。NPの国際ガバニング・カウンシル（IGC）のメンバーのひとりであるEric Bachmanと、一部の、NPの活動に強い興味を持ち、ある程度の詳細を知っている人たち以外は、これまでNPについても、スリランカについても、多くの知識を持ち合わせない聴衆が大勢を占めていましたが、わたしの話を大変熱心に聴いてくださり、さまざまな関心を持って質問を投げかけてきました。なんとといっても、特に関心が高かったのは、NPがどのように地元（SL）の人々に受け入れられ、どのような評価を受け、またフィールドでの毎日が実際どんなものなのかといったような部分でした。この報告書の最後に、わたしの講演の概要（アウトライン）と、おもしろいと思ったり頻繁に受けた質問、回答するのが困難だった質問をいくつか書き出しますので、参考にしてください。

日本に1週間滞在してはいたものの、雨季とは言え常夏のスリランカから、冬に入りつつあるドイツへの旅は、2年間冬（というより、冬の風情とか冬に付属するものことなのですが）にあこがれていたわたしにとっても、寒さに震える2週間でした。が、ドイツの人々、ドイツNP関係者の暖かいもてなしと、NP

／NPSLに対する関心と情熱に、感動し、また感謝する旅となりました。NPとNPSLが世界各国の多くの人々に認知され、関心を持たれ、支援されている現実を垣間見、そしてこれから先もさらに支援されていくことを祈りつつ、ツアーを終えました。人前で講演に臆しがちなわたしですが、今回こうしたまたとないチャンスをいただいたことに感謝し、またわたしの招聘を可能にくださった方々に、感謝したいと思います。

今度は日本国内でみなさまにお会いできるチャンスがあることを、心から祈っています。

洪水が心配される雨季の
スリランカより

(11月22日)

＝参考＝

ドイツ・スピーキング・ツアー講演内容

1. NPについて

ガンジーのシャンティ・セーナ（平和部隊）の構想、NPの特徴

2. スリランカ（SL）とNPスリランカ・プロジェクトについて

NP設立総会／トレーニング／フィールド・オフィス／政治的・社会的状況

3. 活動

1) NP・SLプロジェクト全体と現地パートナーとの共同事業

PAFFREL との総選挙監視、人権委員会、災害救援監視 対策部(DRMU)との津波救援活動監視

2) チーム別活動（ヴァルチェナイ、ムトゥール）、その他の日常活動

4. マータラ／トリンコマリ－・タウン／パティカロア南部の現在の状況、PAFFREL との大統領選挙監視

5. 課題・チャレンジ

6. 質疑応答で出た質問：

NPはどのようにして始まったか／トレーニングについて／地元の人々あるいは団体とどのように関係作りをしていくのか／チームは地元の人たちがNPのオフィスに来て、彼らの問題を訴えるまで待っているのか／資金や物資を与えないNPの活動を、地元の人たちにどのように理解してもらうのか／フィールドでの実際の毎日はどうなのか／活動中危険な目にあったことはあるか。危険を感じたことはあるか／SL政府とLTTEがNPをスリランカに招聘したのか／SL政府とLTTEは、どのようにNPとNPの活動を見、評価しているのか／SL政府とLTTEの紛争は、植民地時代の問題に深いところではかわりがあるか／もしNPがSLでのFTMの数を増員したら、効果が上がるか。もしそうであるなら、NPはさらになにができるか／NPのSL以外（世界の他の地域）での活動はどんなものがあるか／もしチャンスがあるなら、あなたはもう一度（別のプロジェクトで）NPの活動に参加したいと思うか／（NPを支援するために）自分の国でなにができるか／NPの主要な財源はどこから来るか。誰が財源を支援しているか

(以上)

スリランカ大統領選挙国際監視団に参加して

NPJ 理事 大橋 祐治

はじめに

スリランカではクマラトunga大統領が2期11年の任期を終え、後任の大統領選挙が11月17日に行われた。スリランカは民主化の一環として1994年より大統領選挙と総選挙では、国際選挙監視団を招聘して選挙の公正を図り、また国際社会へのアピールを行なっており、今回の大統領選挙に際しても、PAFFREL（「自由と公正の選挙のための市民行動」と称する全国的NGO連合体—People's Action for Free and Fair Elections）とCMEV（The Centre for Monitoring Election Violence）が共同で国際監視団への協力を呼びかけた。

折しも、スリランカでは2002年、ノルウェー政府の仲介によるLTTE（タミル・イーラム解放の虎）との停戦協定以降、それに続く和平のための本格的な交渉が大統領、政党間の方針の相違により停滞、更に昨年末の津波被害に対する国際社会の援助の配分の仕組みについての利害関係者の不一致がこれに拍車をかけ、和平の進展に関し何らの展望も見えない状況が続いている。今回の大統領選挙を契機にいずれの候補者が当選しても和平交渉と津波被害者への本格的支援活動に前進がもたらされることを国際社会は期

待している。

以上の背景の下に、筆者は今回の大統領選挙の国際監視活動に参加したので、その感想を幾つかの視点から述べさせていきたい。なお、選挙の概要、監視団から見た評価などは別途、PAFFRELが暫定報告書を提出しているのでそれを参照されたい。

1. 国際選挙監視団と非暴力平和隊(NP)

PAFFRELは国際監視団招聘に際し、「自由と公平な選挙のためのアジアネットワーク」(ANFREL)と非暴力平和隊(Nonviolent Peaceforce)を中心に働きかけた。ANFRELについては、スリランカがアジアの構成員であり、PAFFRELの事務局長がANFRELの理事であることが背景にあるが、非暴力平和隊については、非暴力平和隊が最初の活動の場としてスリランカを選び、2003年9月よりフィールド・チーム・メンバー(FTM)をスリランカに派遣し、要衝に拠点を設置してスリランカ市民の平和活動を支援してきた実績と、昨年総選挙での国際監視団派遣の実績が評価されたものと思われる。

今回、35カ国約100名の国際監視団の内、非暴力平和隊に連なるNGO組織か

らの派遣はほぼ半数に近い。この内、12名がスリランカ各地に展開しているFTMの現地参加であり、その他は各国の非暴力平和隊加盟組織からのボランティアである。日本からは筆者と小林善樹氏の2名が参加、英国からは非暴力平和隊の共同代表であるTim Wallisも参加した。

注記：国際監視団国別内訳

アジア

日本	6	カンボジア	2
台湾	1	マレーシア	1
タイ	6	インドネシア	1
ビルマ	1	バングラデシュ	3
インド	6	アフガニスタン	3
ネパール	1	パキスタン	4
フィリッピン	3		
小計	38		

中東・アフリカ

イラン	3	ヨルダン	1
ガーナ	1	カメルーン	1
ブルンジ	2	南アフリカ	1
ナイジェリア	1		
小計	10		

ヨーロッパ

英国	8	スコットランド	1
ドイツ	2	スウェーデン	2
スイス	1	イタリア	1
スペイン	1	フィンランド	1
ノルウェー	2	オランダ	2
チェコ	1	ギリシャ	1
小計	23		

米州・オセアニア

米国	17	カナダ	6
オーストラリア	5		
小計	28		

合計 99名（他の数字との整合性は取れていない）

2. スリランカ選挙区と

国際監視団派遣の仕組み

スリランカは 22 の選挙区とそれぞれの選挙区が更に幾つかに分割された 160 の地域（日本で言えば東京 1 区、2 区などに相当）からなる。それぞれの地域に数十箇所の投票所があり、その数は合計約 10,000 箇所である。

国際監視団は原則 2 人一組のチームで通訳 1 名と合わせて 3 名で、専用の車が与えられ 22 の選挙区に派遣される。問題のある選挙区には最大 4 組 8 名、通訳を含めれば合計 12 名が共同・分担して選挙監視に当たる。コロンボで 11 月 11,12 日の 2 日間のオリエンテーションを受け、コロンボから遠い地区には、その日の内に担当選挙区に向け出発する。

選挙区では地元の PAFFREEL 及び選挙管理委員会、政党支部、警察、軍関係者などを訪問し、一般情勢や問題点などの情報収集に当たり、次いで投票所を視察し、選挙当日、重点的に監視すべき投票所、その他の場所を特定しておく。投票日前の 2 日間は冷却期間（cooling-off）



NP のヴァルチェナイ事務所で

と称して、選挙活動は禁止されており、候補者の看板やポスターなども撤去したり剥したりしておかねばならない。

投票は午前7時に開始、午後4時に終了するが、終了後、6時までにはチームごとに PAFREL のプレス発表のための選挙に関する報告書を e-mail、fax その他の方法で送らなければならない。終了後、当日かあるいは翌日にコロンボに帰り、PAFFREL 当局に地区ごと、チームごとの詳細な報告を行い、そこで監視団としての任務が終了する。

選挙区での1週間は毎日車での移動の連続であり、朝、晩の全員集合しての計画と実行との反省、情報交換、緊急事態への対処など、緊張と集中での毎日であった。

3. バティカロア地区の活動状況

小生はバティカロア地区で監視活動を行なった。この地区は東海岸に接した中ほどに位置したタミル人が70%強、ムスリム系24%で残りがシンハラ人、その他である。バティカロア地区の北部、南部、内陸の西部地域の多くが LTTE 支配地域であり、また昨年4月の LTTE 内部分裂により LTTE から離脱したグループの拠点であった地域なので、政府と LTTE 間の緊張のみならず、LTTE 離脱グループとの抗争、更にはムスリム系も与党支持と野党支持とが対立している等問題を抱えている所である。投票日の前夜（北部地域ではもっと早かったようだが）、



LTTE が「大統領選挙はタミル社会にとって何らの益もない」との声明を発表し事実上選挙をボイコットするよう呼びかけたので、LTTE 支配地域に住むタミル人の多いこの地区の投票率は44.7%と全国平均の73.7%を大きく下回った。

投票日の2日前に LTTE のチェックポイント（検問所）を通り、LTTE 支配地域に12km ぐらい入った集会所で、その地域の PAFREL 関係者達（ほとんどが20歳台の若者）と面談した際には、全員が投票日には投票所に来ると言っていたが、投票日に LTTE 支配地域の手前に設置された仮設の集合投票所に行ってみると選挙管理関係者と武装警官がいるだけで、投票者は勿論、大統領候補の代理者も PAFREL 関係者も誰もいない。

そこで選挙管理の責任者に聞いた所、LTTE が選挙ボイコットを呼びかけたので投票所までのバスを 8 台送ったがバスが LTTE 支配地域内で止められて帰ってこないとの説明であった。

パートナーのティム・ウオリスと話し、リスクはないだろうと判断して、バスが止められている所までとにかく行って見ようということになった。LTTE 支配地域に入り人が集まっている所で何箇所か車を停めてなぜ投票に行かないのかと尋ねると、バスが来ないからとの返事。バスが来ると投票に行くのかと尋ねるといづれも口をそろえて yes と答える。バスが止められている場所に着き、地域の責任者と交渉し止められているバスを 2 台巡回させて投票所まで行くことになった。我々の車はバスの後に続き住民の様子を伺ったが誰もバスには乗らず、結局、そのままバスは投票所に着いた。危険を冒してまで投票することはないというのが LTTE 支配地域の住民の気持ちであり当

然とも言える。

ここの投票所での有権者約 7 千人の内、我々がそこを離れる 11 時までの投票数は 9 票であった。投票所敷地内での爆発物、本人以外の投票者カードの所持、投票したことを記す左手小指のマーカの不具合、そのために何回も投票する人、投票所の外で特定候補への投票を呼びかける人達、等の違反行為は数多いが、やはり今後の政局にとって最大の問題は LTTE の選挙ボイコットの呼びかであろう。もし、選挙ボイコットがなければ選挙結果は逆になっていたことは確実と言われている。

4. 多国籍の国際監視団

バテイカロア地区担当は 6 カ国 8 名の正に多国籍グループであり、共に過ごしたバテイカロアでの 1 週間は大変貴重な体験であった。まず、その構成を見ていただきたい。

チーム	名前	国籍	現住所	性別	年齢	職業
1	Daniel Trippe	英国	スリランカ	男	26 才	NPSL ウェルチエナイ
	Radek Cerny	チェコ	カナダ	男	20-30 前半	環境保護関係
2	Silke Nebenfuehr	オーストリー	英国	女	20 台	?
	Susana Anayatin	フィリピン	フィリピン	女	40 台	政府役人
3	Jonathan Luis	英国	日本	男	40 台	大学教師
	Luckshmi Sivalingam	米国	米国	女	20 台	?
4	Tim Wallis	英国	英国	男	50 台	NP 共同代表
	Yuji Ohashi	日本	日本	男	70 台	NPJ
	備考	6 カ国	6 カ国			

● それぞれのチームごとに一人のスリランカ人の通訳が付くのだが、それぞれが職業を持ち、性格や考え方も違うのだが、地域情報に詳しいし、ある意味では国際監視団の働きも彼らの協力如何にかかっている所もあるので、内部打ち合わせも殆どの場合、彼らを含めて行われた。日中はチームに分かれて行動するが、原則、朝、晩にはグループが集まりミーティングを持ち、報告、行動確認、注意事項など情報交換を行う。

● グループのリーダーは NP の FTM 第2次要員として9月初旬にヴァルチェナイに配属されたばかりの弱冠 26 歳の Dan Trippe であった。彼は平和造りを自分の使命と受け止めて NP に応募したといわれ、通訳も含めメンバーの意見をよく聞き、コンセンサス的に結論を引き出すなど、十分リーダーシップを発揮した。共同代表の Tim Wallis が何かと Dan を支えたことも全体としてのまとまりを保つのに貢献した。

● Dan はメンバーの安全を第一に優先してメンバーの意見を聞き決定を行なった。投票日前日の夜の打合せで、通訳全員にそれまでの担当地域で危険がないかどうか各自が確認し変更を希望するならば申し出るように要請した。我々チームの通訳は、最初は問題ないと言っていたが、最後に変更を申し出て、他の通訳と替わった。彼はたまたまその地域出身の若者で、十分な土地勘があったので事前

調査には重宝したのだが、我々の担当地域には与野党に分かれて激しく対立するムスリム地域があり、投票日の二日前に我々のチームはその紛争に巻き込まれ、通訳が一方の当事者から“お前は裏切り者だ”といわれる事件があった。通訳はタミル系でムスリムではないのだが、その近くに住んでいるので顔見知りであり、投票日当日にはどうなるか気がかりであった。そこは投票日に最初に訪問しようとしていた、懸念のある投票所でもあり、実際様々な違反行為が行われていた。その土地出身の若い通訳から、コロンボから来た老練な、しかもムスリム系の通訳に替えたことは違反行為を確認し、場合により警告を与えるなど最小限のリスクで選挙監視の使命を遂行できた点でプラスであった。当日に二日前と同様の対立するムスリム間の紛争に巻き込まれ、その時 Tim にあまり深入りせぬよう小生は注意したのだが、その混乱から離脱するタイミングを失し、最後は NP のヴァルチェナイ事務所に現場に来るよう応援を求め、何とかその場を切抜けた次第である。

● 選挙期間中は様々な情報が飛び交う。疑わしいと思いながら無視するわけにはいかず、色々振り回された。因みに情報源の一つが携帯電話で流されるテキスト放送(?)である。特に通訳が常時携帯で情報を入手しては我々に伝えてくれるのだが、結果的にあまり信憑性はなかったようである。投票日の 17 日、4 時に

投票が終わり、コロンボの PAFFREL 本部に報告書を送るため各々チームが担当地域からバテイカロアの PAFFREL 事務所（ここはカトリックの修道院で、この地域の PAFFREL 責任者は神父さんであったのだ）に集合し報告書作成に取り掛かった。我々のチームが到着したのは 5 時半頃であったが、6 時か 6 時半頃から外出禁止（curfew）になるとの情報が流され、大急ぎで報告書を作成し、後は Dan に頼み、大半は 6 時半ごろ車に分乗してホテルへと向かった。その時にも、我々外国人には厳しくないだろうが、通訳、運転手は引っかかると面倒になるだろうとの配慮で、通訳や運転手が一人にならないような配慮をした。翌日聞いた所では、Dan と若い二人は 11 時ごろまで事務所に残っていたとのことであった。コロンボの受け取り側のラインが一杯でなかなか FAX が通じなかったのと、納得のいく報告書を書いていたためである。結局、外出禁止令ではなく、一部道路の封鎖（投票箱を集計所まで運ぶ道）だけであったのだが、そうした事態にも動じることなく与えられた任務を淡々と誠実に遂行しようとする使命感に心から敬服した次第である。

5.わが共同代表 Tim Wallis について

● Tim はもともと新大統領の出身地である南部のハンバントータ（Hambantota）に行く予定であったが、小生のパートナーとなるはずのインド人



住民のクレームを聴取する Tim Wallis が現れず、その代わりとして Tim がパートナーとなった。小生にとっては大変幸運であった。コロンボを出てコロンボに帰るまでの丸 1 週間、寝る時以外はずっと行動を共にした。コロンボからバテイカロアへの途中で一泊した際には部屋数が足りず Tim と相部屋であった。よほど疲れていたようでベッドに入るなり寝息が聞こえ、翌朝は食事の時間になって小生が起こしたほどであった。出発前にロンドンで色々忙しかったらしい。NP について色々話す機会があった。

● Tim は NP の共同代表として申し分のない人物であると思う。今回の選挙監視活動では彼が第一線での活動家であることを様々な局面で見せてくれたが、ブラッドフォード大学の平和学博士でもあり理論に裏打ちされた活動家といえよう。大畑豊氏と入れ替わりに PBI（国際平和旅団）を去った。最も危険を感じたのは 1995 年ごろ、チェチェンの人権問題でチェチェン内で活動していた頃で、道なき道を通ってチェチェンに出入りしたとの

ことである。Peaceworkers,U.K.とあるので、デビッド・ハートソー (Peaceworkers, U.S.A.) と一緒に仕事をしているのかと思ったが、U.K.は独立して活動しているとのことであった。

● Tim は誰とでも気さくに話しが出来る、若者からも親しまれ、人の意見をよく聞き、判断は現実的であり決定は早い。組織運営の理解もあり（それぞれの職務を尊重する）指導者としての適性を有している。

今回、スリランカが初めての訪問であると言うのは驚きであったが、現場を理解したのでこれからのスリランカ・プロジェクトについての彼の指導力に大いに期待したい。投票日の翌日の午後、コロンボで彼の主催する High Tea Reception (5時～)での彼のスピーチは、彼が雄弁家ではないと思わせた（勿論その必要は無いが）。スリランカ・プロジェクトの新しい責任者のマルセル・スミットも同様である。

● 他に印象的であったのは、我々二人はヴァルチェナイで2回、コロンボで1回、それぞれ通訳の方の自宅で昼食をご馳走になった。Tim が黙々として不器用な手つきで食事をする様子、小生も食事は大変おいしいのだが、どうも手で掴むのがなかなか馴染めなくて出来れば口実を設けて断りたかったのだが。

もう一つ付け加えるならば、彼はメモリー・ステックだけ持っていた。コロンボでの PAFFREL への口頭での報告の後、

書類にするよう要請があり、あわてて書類の作成に取り掛かったが、手書きでは時間がかかり、何とかパソコンを調達できないかと探した。PAFFREL でもパソコンは数台用意されていたが、全て使用中であった。幸いに、ヴァルチェナイでの通訳がコロンボまで来ており、彼がパソコンを持参していたので、それを借りて仕事を済ませることが出来た。報告書はメモリー・ステックに記録し、後に必要な宛先に送付した。要するに持ち物は最小限で出来るだけ現地調達する、現地で何とかするとのこれまでの経験がそうさせているのではないかと思った。

6.選挙結果と今後のスリランカ和平の見通し

ラニール・ウイクラマシンハ (Ranil Wickremesinghe) ではなくマヒンダ・ラージャパクサ (Mahinda Rajapakse) が僅差とはいえ大統領選で勝利したことは、大方の予想に反し、また特に日本側の見方と異なったようである。しかし、選挙後の情報を総括すればマヒンダ勝利イコール和平交渉の挫折、ラニール勝利イコール和平交渉の進展といった単純なものではなさそうだ。

選挙後にジャフナやトリンコモリーで殺人事件が報じられているが、過激派の扇動や誇張した報道に乗じられることなく、新政権の動きを冷静に見守る必要がある。LTTE も含めスリランカの政治にかかわる全ての人々が国際社会の目が

見守っていることを知っている。市民の平和活動家を支え、紛争当事者双方からアプローチを受けるなどコミュニティの中に深く静かに潜行した NP の地道な働きが認められつつある。

スリランカの和平にとって NP の役割

は今後ますます重要になってくると思われる、そうした自覚を持ってその一翼を担うものとしての非暴力平和隊・日本の基盤を強くしていきたいと思う。

スリランカ大統領選挙の国際監視団に参加して

NPJ 理事 小林 善樹

スリランカの大統領選挙の国際監視団の一人として11月10日から19日まで滞在して来ました。NP スリランカのパートナー団体である PAFFREL の呼びかけに応じて出かけたのですが、世界中から約100人が参加していました。日本からの参加者は6人で、大橋さんと私の他に、一橋大学大学院社会学研究科教授の足羽 與志子さん、庭野平和財団専務の野口親一さん、一橋大学大学院社会学研究科博士課程の坂下雅一さん(去年は JCCP のメンバーとして参加されておられ、今回は私とペアを組んでたいへんお世話になった)、インターバンドという NGO のインターン秋山マコトさんでした。

それから ANFREL (Asian Network for Free Elections) というネットワークのことを今回初めて知ったのですが、そのメンバーの人たちが20人も参加していたことが目立ちました。パンフレットによると、1997年に結成され、バングラデ

シュ、カンボジア、インド、日本、ネパール、パキスタン、インドネシア、フィリピン、韓国、スリランカ(これは PAFFREL)、タイの NGO が加盟しているようです。日本からの加盟団体はインター・バンドで、首藤信彦さんが代表をしているとのことでした。

ANFREL のパンフレットによると、そのマンデートは、アジア地域の民主化の活動を支援することであり、選挙監視や民主化関連の教育・トレーニングなどの活動をする各地域のグループを支援することとしています。このような連帯が作られていることは大いに喜ばしいことだと思いました。

スリランカの有権者数は約1332万人、22の選挙区に分かれており、さらにそれぞれが市や郡で構成されている。108人ほどの国際監視員を原則的に2名ごとの55チームに分け、一つの選挙区に2な

いし5チームを配備したが、今回は北部と東部に重点的に配備したという。私たち6人（オーストラリア人、米国人、日本人それぞれ二人ずつ）が配備されたのは、北部のワニ選挙区の中のワウニヤ地区でした。北部のジャフナやLTTEの本拠地とされるキリノッチの南側にある地区で、ワウニヤ地区(有権者数 104,884人)のうち北側の部分(有権者数 14,697人)と北側のムラティヴ地区(有権者数 65,596人)のすべてはLTTE支配地域となっているという地区でした。2001年の統計によると、ワウニヤ地区の民族構成は、シンハラ 16.6%、スリランカ・タミル 56.8%、インド・タミル 19.6%、ムスリム 6.8%となっており、シンハラの少ない地域である。

ワウニヤという町から国道 A9 号線を北進すること約 20km、約 45 分で政府側支配地域と LTTE 支配地域との境界地点に達します。国道 A9 号線の西側は LTTE 支配地域となっており、国道沿いには掩体壕(えんたいごう、土塁と土囊積みで囲った銃撃拠点)が点在し、ところどころにバリケードが置かれて交通規制され、兵士が自動小銃を構えて見張りをしていました。しかし、境界に近づいても政府軍兵士にはそれほどの緊張感は感じられなかった。この2年間ともかくも停戦協定が維持されて来たからであろうが、この境界域が今後そのまま固定されていくことになりはしないか、という危惧を感じ

た。

さて、境界を越えて行くには政府側のチェックポイント(検問所)で荷物検査などを受け、3km程向こうでこんどはLTTE側のチェックを受け、ビザ様の書類を出してLTTE支配地域に入るのだそうだ。

政府側支配地域とLTTE支配地域のことを、クリヤード・エリア(掃討済み地域)、アングリヤード・エリア(未掃討地域)と呼んで分類しているのは、政府側の一方的分類であり、抵抗感を感じた。

LTTEの支配地域には投票所は置かれていない。境界線から3kmほどのオマンタイにある学校に集中投票所群(これをクラスター・ポーリング・ステーションと呼んでいる。悪名高いクラスター爆弾のクラスターで、葡萄の房のように投票所がつながっている)を設け、LTTE支配地域の有権者(ここではムライティヴの65,596人とワウニヤ北部の14,697人、合計80,293人)はそこまで出向いて投票することになっている。オマンタイの集中投票所群には、ムライティヴの49か所とワウニヤの14か所の合計63投票所が1か所にまとめられていた。

LTTE支配地域内ではLTTE側が手配するバスに乗って境界まで来て、両方のチェックポイントを歩いて越え、政府側

の手配するバスに乗って3kmほど離れた投票所まで行く、という手筈になっていた。ムライティヴのいちばん遠いところからだと直線距離にして50km以上あるようだ。こんなに遠くでは投票意欲はおきないのではなからうか、と思われた。大畑さんからメーリングリストに転送されている「スリランカ動向 News@because11/24」によると、ムライティヴからの投票者は902人に過ぎなかったという。約1.4%に過ぎない。さもありませんと思う。

昨年の総選挙の時は、LTTE側の候補者を当選させるために多くの有権者が選ばれて来たそうだが、今回の大統領選挙に対しては、どの候補者が大統領になってもLTTEには良いことはない、というところをえ方をしている、以前から選挙をボイコットするのではないかとの情報が流されていた。しかし、前日になってLTTEはボイコットの方針を変えたという新聞情報や、バスを手配したというような噂が流れたりしたが、投票日前夜になってボイコットの方針を再確認したようだ。

とにかく上記のような状況なので、投票に行くこと自体、LTTEがバスを手配するかどうかによってコントロールされてしまっているわけで、当然ながら、誰がバスに乗ったかも把握されているのだろうと想像される。これでは「自由で公正な選挙」とは到底言えない状況でした。

このようなシステムが成立している理由は聞けなかったが、政府側は、LTTE支配地域に設けたのではLTTE側に管理された選挙になると考え、LTTE側は、政府側の人間がLTTE支配地域に入ってくることを嫌った、という立場の違いから、お互いに言い分を通したという体裁をとった妥協案と理解して間違いないだろうと思う。

各投票所には、受け付けて名前を呼び上げる係、「消えないインク」で左手小指の先にマークをする係、投票用紙を渡す係(この3人は、投票所の規模によっては男性の列と女性の列ごとにいる)、投票所を管理する主任係官と補佐役、と五役(5ないし8人)の公務員、政党側代理人数人、それにPAFFRELなどの常駐監視団が加わるので、63もの投票所が固まっているとなると、上記の人数だけで何百人にもなってしまう。さらに警備の警官が小銃を持って立っているし、話題の集中投票所群となると内外のジャーナリストやカメラマンまで加わる、といったことで、大変な人数がかかっているのに、有権者がほとんど現れない、というなんとも珍妙な状況でした。

今回気になったことは、武装警官が法律に違反して、投票所の中に立っていることだった。これは去年の南部のラトゥナプラでは見られなかったのだが、ワウニヤでは当たり前のように投票所内に

入っていた。主任係官に違法じゃないのか、と言っても、警察だからしょうがない、という態度だった。私たちの感覚からすれば、小銃を持って警官が立っている、ということに威圧感を感じないのだが、有権者たちの素振りを見るかぎり、気にしている様子はまったく感じられなかった。慣れっこになってしまっているのだろう。

今回私たちの配備された地区では暴力行為はまったくなく、至って平穏な状況でした。私たち外国人が見ているよ、という国際監視団の存在がなにがしかの良い影響をもたらしたものと思います。

今回の大統領選挙には 13 人の候補者が立候補していた。有力候補者は与党側の前首相マヒンダ・ラジャパクサ氏と、野党側の前前首相ラニル・ウィクラマシンハ氏の二人で、他の 11 人は合わせて 1.3% の得票を得たに過ぎない。この有力候補二人で 98.7% の得票を占め、22 の選挙区のうちそれぞれ 11 の選挙区を制し、489 万票対 471 万票という僅差で与党側が大統領の地位を獲得したわけだが、野党側が制した 11 の選挙区のうち三つでは、投票率が低かった(全国平均が 73% なのに対して、ジャフナ 1.1%、ワニ 33.6%、バチカロア 47.8%)。この低さは LTTE の選挙ボイコットの影響と見られる。

11 月 10 日の夕刻から NP スリランカの新しい事務所で NP 関係者の顔合わせの会が開かれ、40 人くらい集まりました。自己紹介と懇談でしたが、関西学院で 3 年間教鞭を取ったとか、青森で 1 年間英語の先生をやった日本語の上手な女性など、日本に関わりを持つ人もいた。

選挙が終わって戻った 18 日の夕刻には、宿舎のマウント・ラヴィニヤ・ホテルの一室で NP 関係者の「お茶の会」が開かれた。60 人くらいいました。大島みどりさん、NPJ 会員の小森洋祐さんも参加していました。世界中の NP の仲間たちと交歓できることは実に得難い経験ですね。英語がそれほどうまくしゃべれぬ私とは違って大橋さんは交流を深めておられました。

スリランカ北部の国道 A9 号線の両脇は大半が広々とした田んぼ、田んぼになっていない原野では牛が草を食んでいるそばでサギが飛び出す虫を待っている、というのどかな風景だったが、田んぼになっていない部分は地雷がまだ除去されていないからだ、と聞いた。

稲作は雨季に入った今が種まきの時期のようだ。



理事会 報告

12月4日、NPJ事務所にて理事8人（青木護、青山正、阿木幸男、安藤博、大橋祐治、大畑豊、小林善樹、岡本三夫）出席、小森洋祐さんがオブザーバー参加のもと行なわれました。以下簡単な報告です。

●CPTメンバーの誘拐に関して

NPJとして声明を出して、アルジャジーラ、マスメディアに発表する。

●国際総会開催の件

国際事務局からの打診に対してこちらから一度質問を送り、それに対する回答があった。それ以降の応答はない。

11月7日付で国際事務局からメンバー団体メーリングリストに次回国際総会開催国の公募に関するメールが配信されたので、現時点では、公募に対して手をあげる（招致する）かどうかということになるが、現段階では手を挙げないことにする。

開催に関する意見としては：「起爆剤としてすべき」「国際会議を開くと言う方がお金は集まりやすい」「日本でやるお金あるなら、他のことに、特にフィールドにもっとお金を振り向けるべき」「日本では割高だというなら『南側』諸国でしか国際会議は開けないことになりおかしい」「起爆剤というよりはそれが頂点となり、あとは下降一方になる場合が多い」「会議開催に労力がとられ、他のことができない」「前回の総会はアジア地区だったので、他の地区で開くべき」

「現在プロジェクトをしているスリランカでとかはどうなのか」等々出た。

●これに関連し、当面優先的になすべきこと、当面の課題について議論された。

（国際総会より）アジア地域、特に韓国等との連携を深める活動が必要。国内でNPJの宣伝をするための新しいリーフレット作成。国内での認知度を広めるためにも、もっと自由に他の活動に賛同とかをしていくべき。国内プロジェクトに関しては厳格に **non-partizaship** を守る必要のないのでは。他国メンバー団体はそんなに縛られていないのではないか。非暴力・非武装・平和・人権の視点から発言していくべき。

●SL大統領選挙監視活動報告

小林・大橋・小森各氏から映像を交えた報告あり。本紙6ページ以降の「スリランカ大統領選挙国際監視団に参加して」参照。

●その他

・今回のSL監視活動参加などはまさにNPJとして積極的に支援すべきであり、活動参加費として小林さん、大橋さんに3万円ずつ支援する。

・ベツレヘムで、NPも企画に関わっている非暴力抵抗国際会議（12月27-30日）が開催される。これに参加する清末理事から参加費助成の依頼が理事会に出された。この依頼に対し、2万円の支援をする（ピースネットも別途支援する）。 以上

報道でもご存知と思いますが、クリスチャン・ピースメーカー・チーム（CPT）のイラクでの活動家4人が誘拐されました。NP、NPJは声明を出し、アルジャジーラや国内マスコミに送信しました。イラク人被拘束者の釈放を求める期限の12月10日を過ぎましたが、12日現在、4人に関する新たな情報はありません。

CPTのイラクでの人権活動に対しては2003年に「多田遥子反権力人権賞」が授与され、イラクで活動していたメンバーの一人、ペギー・ギシュさんが来日され、NPJでも講演をしていただきました。

イラクで誘拐された人権活動家たちの解放を求めます

2005年12月6日

非暴力平和隊・日本（NPJ）

国際人権NGOクリスチャン・ピースメーカー・チーム（CPT）の4人のメンバー（カナダ人2人、英・米国人各1人）がバグダッドで武装グループによって11月26日イラクのバグダッドで誘拐されました。誘拐したグループは彼らはスパイであると主張していますが、このメンバーらはスパイでもなければ、特定の政府のために働いているわけでもありません。彼ら並びにCPTは、明確にイラクへの侵攻、および占領に反対しています。そしてイスラム教、そしてイラクの人たちの民族自決の権利に対し、深い敬意を表しています。

私たちは彼らを拘束している人達に、彼らが再び人権侵害の目撃者、および平和のために働くという仕事に戻ることを望んだならそう出来るように、彼らを危害を加えないまま解放することをアピールします。

CPTは政府（諸国の）に政治的圧力をかけることを“望んでいません”。CPTは世界のムスリム関係者にアラブのメディアを通じて誘拐者たちにアピールすることを望んでいます。CPTは特にムスリムの聖職者たちがこのアピールをすることを望んでいます。

もし、貴方がムスリムやアラブの友人、知人を持っているならば、貴方の友人たちに、書面で或いは、アルージャジーラやその他のアラブのメディアに呼びかけCPTの人質の解放を支援するよう要請してください。

また個人としてもアルージャジーラのウェブサイト（英語）の **feedback section** にメッセージを送ることも出来ます。

<http://english.aljazeera.net/HomePage>

非暴力連続講座 今後の予定

1月 参加者交流会

第12回講座「非暴力介入の実践」で講師をした清末愛砂さん（NPJ 理事）がピースネットニュースに連載していた「世界の非暴力運動」がピースネットニュースからブックレットとして1月に発行されます。その出版記念会と合流して行いますので是非ご参加ください。

日時：1月14日（土）17:00～

場所：SCAT(スカット)セミナールーム（東西線 神楽坂駅より徒歩4分）

新宿区天神町6-3 神楽坂メゾン2階 TEL 03-3269-8296
東西線神楽坂駅出口2番から出て、右に進んで天神町交差点で「長崎ちゃんぼんリンガーハット」側に渡り、その右側並び3軒目ぐらい。道路反対側にはコンビニ a m p m。

参加費：飲食実費（1000円～2000円程度、飲み物・食べ物持ち込み歓迎！）

2月 第17回 トランセンド----紛争を超越する（仮題）

平和学の生みの親であり育ての親であるヨハン・ガルトゥング氏は、紛争当事者との対話・議論の自分の経験から、紛争解決ではなく、紛争転換という考え方を編み出した一人です。それは、双方の対立の妥協点を調整するのではなく、対立や矛盾から飛躍して新しい創造的な解決法を探し出すという方法であり、ガルトゥングは、「超越法（トランセンド・メソッド）」と呼んでいます。その手法と実践について学びたいと思います。

ウェブサイト：<http://www.transcendjapan.org/>

参考書籍：「ガルトゥング平和学入門」ガルトゥング著、法律文化社

「平和的手段による紛争の転換【超越法】」ガルトゥング著、平和文化

「平和を創る発想術：紛争から和解へ」京都YWCAほーぼのぼの会、岩波ブックレット

「あの人と和解する：仲直りの心理学」井上孝代著、集英社新書

講師：奥本京子 大阪女学院大学助教授、NPJ 理事

トランセンド(平和的手段による紛争の転換)研究会・事務局長

日時：2月4日（土）18:30～21:00

会場：文京シビックセンター4階・和室1

東京都文京区春日1-16-21 Tel: 03-5803-1105

交通：東京メトロ地下鉄丸の内線・南北線「後樂園駅」徒歩1分

都営地下鉄三田線・大江戸線「春日駅」徒歩1分

参加費：800円

